

青年の地域間移動パターンの変遷過程(その2) : 地域定着の条件に関する事例調査報告

岡崎, 友典
放送大学

佐藤, 郡衛
日本青少年研究所

吉本, 圭一
雇用職業総合研究所

鎗水, 忠孝
埼玉栄東高等学校

他

<https://hdl.handle.net/2324/10646>

出版情報 : 日本教育社会学会大会発表要旨集録. 39, pp.31-31, 1987-10-08. 日本教育社会学会
バージョン :
権利関係 : 日本教育社会学会



青年の地域間移動パターンの変遷過程（その2） ——地域定着の条件に関する事例調査報告——

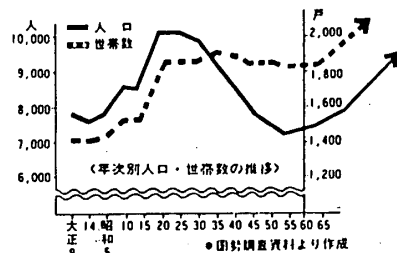
○放 送 大 学 学 岡 崎 友 典
日 本 青 年 研 究 所 佐 藤 郡 衛
雇 川 職 業 合 研 究 所 青 本 圭
○ (埼 玉) 栄 十 高 等 学 校 水 忠
日 本 赤 字 米 中 学 校 見 麗
(東京) 東 久 留 米 中 学 校 孝 子
江

（1）調査対象地の概要

本報告は、第34回大会（広島大学）で第一次報告を行った、N県K町における実態調査研究の継続である。今回は特定の集落を対象にして、青年の地域定着の条件について、「事例研究」の手法を用いて報告を行う。

K町は人口約7000人の山間の小さな町であるが、日本有数の河川の最上流部に位置し、さらに山間部の四つの町村を含めて約2万人規模の、いわゆる「流域生活圏」の中心都市の機能を果たしている。就業者の産業別構成は、第一次4割、第二次と第一次がそれぞれ3割で、商業機能が強い。標高600メートルから1000メートルに23の集落が点在している。1951年に川を挟んだ同規模の二つの町が合併して30余年たつ。一時人口が約1万になったが、1960年代の高度経済成長期に急激な人口の減少をきたしている。

しかしながら、図1にみるように第一回国勢調査時と人口はほぼ同じである。世帯数の増大は、1970年代の集落移転などにもなって核家族世帯化が進行したことによる。もちろん町中心の商業地区への他町村からの流入もみられる。産業構成を考え合わせるならば、前回も指摘したがこの地域の人口扶養能力は、7～8000人程度とみることもできる。したがって、集落単位では過疎化が進行したところもあるが、町全体としては過疎とはいえず、むしろ安定した山間の小都市と規定できよう。



今回の事例研究調査地は、同町の中心から東へ7キロほどさらに山のなかに入った、標高1000メートルの南斜面に位置する世帯数90、人口392の集落「O地区」である。1985年の農業センサス「農家調査」によれば、総農家戸数78で、総農家人口370で地区人口に占める農家人口比は94%と非常に高い。町全体が57%であるので、農業への関わりが極めて強いことがこの地区の特徴といえる。

（2）郷土芸能と定着の条件

「O地区」をとくにとりあげたのは、この地区に江戸時代より伝承される人形芝居が、若者の地域外への流失をくい止め、さらにはUターンを促進していると聞かされたからである。地域の文化が人口移動と関連することは十分予想されることではある。そこで、一般に郷土芸能と呼ばれる地域の行事が、具体的な人々の生活とどのような形でむすびついているかを明らかにすることにより、地域定着の条件を地域移動パターンの変遷過程をどうしてさぐることにした。

本研究では、同町の中学校を1955年、60年、65年、70年の4年度に卒業した総数879名を対象に調査しているが、「O地区」の該当者は61人である。その動向でとくに目立つのは長男の全員が、地区内に居住しており、流失者が皆無である点である。家族風性がこのように顕著なのは、人形芝居の伝承形態とかわっている。

「O地区」の郷土芸能は人形による「三番そう」である。人形遣い4人と離し方8人の計12人によって演じられるこの芸能は、国家の安泰と五穀の豊じょうを祈る土着信仰とむすびついているといわれる。7年を一冊としてそれぞれの役柄に、とくていの家柄（家系＝家筋）があり、しかもその家の長男だけが演じる（出役）ことができることとされてきた。しかしながら、1960年代の高度経済成長期を境にこのような「しきたり」も、次第に形を今日的なものに替えてきている。とくに家柄には固執せず、地区内のすべての家がこの行事に参加できるよう、祭りをとりしきる祭典係は輪番制をとるなどの工夫がなされている。長男以外でも家の後とりであれば、出役できるケースも出はじめている。ただ変わらないのは、各家の男一人に限定されていることである。

このような変化は、産業構造が転換した現代社会に合わせて、郷土芸能を、より合理的なものに創り替えてきたからである。古い形式ばかりにこだわる観光化した祭りにくらべ、地域住民の生活に密着した文化がここに創造されているといえよう。ひとつの集落が減じないために、過去の文化を新しいものに創り替える努力が認められる。今回の対象者のなかでも高度成長期に青年期を過ごした1955年度卒業生8名（1940年生まれ＝現在47歳）のうち、長男4名（1967年から7年間出役した）はすべて地区内に残留しており、次男以下の4名も1人は地区内、1人は隣接の町村に居住している。女子8名についてはすべて他出だが、同一県内5人で県外流失者3名は南関東地方である。

祭りの当日（4月3日）、嫁いだ女性は家族をつれて里帰りするのが習わしとなっている。盆・葬・正月よりも、「春祭り」の方が、この集落では重要性をもつ。

（3）伝承の形態と教育

地区の産業基盤は今日も農業である。森林（杉・有林を除く）も資源ではあるが主要な位置を占めていない。農業構造の改善にともなうパイロット事業により農地は近年急速に拡大しており、第二種兼業が多いとはいえ、世帯収入に占める農業収入の割合は増大している。

それにしても、かなり高度なこの芸能が伝承されてきたのは何故か。地域社会を維持するためとはいえ、なにが若者たちをこの行事に引き込むのか。それは伝承法＝教育法にあるといえる。現役（子方）を指導するのは引退者（親方）であるが、さらにその親方（おじっさ）も祭りの指導にあたる。子方に事故や不祥事のあるときは、親方が出役し、おじっさも舞台にあがる。7年×3代＝21年の間隔は年度祭りの世界だけでなく、現実社会の世代交替と重なっている。また、同じ家族内では親方－子方の関係はありえず、一代置かなければならない。つまり親が自分の子ども（後とり）を、直接指導することができない仕組みになっている。このことが、この芸能を存続させる重要な要因の一つと考えられる。親子間だとしても甘えがでるのをうまく回避させ、他人のきびしさ（一人前の人間として鍛えられる）を教える絶好の機会をつくりだしている点に、この芸能の社会的機能があるといえよう。

なお、発表当日配付資料では、対象者のライフヒストリーを軸として、この芸能と地域定着との関係を素描してみた。